

シュレッダーダスト選別ライン

従来廃棄していたものの中から
有用金属・プラスチックを再回収

複合素材をリサイクルする過程で破砕し、金属を回収後、残ったものはシュレッダーダストと呼ばれ、普通はそのまま焼却されたり埋め立てられたりします。しかし、この中にはまだ取りこぼした金属が残っていたり、「都市型鉱山」と呼ばれる、金銀銅などを使った部品が

粉々になって交じっていたり。

それらをさらに資源化するため、港工場ではライン構成を工夫し、改善を施して、2002年にベースメタル、2007年にプラスチック、2012年に希少金属の回収ができるようになり、ひとまず完成を見ました。

シュレッダーダスト選別ラインの完成によって、それまで捨てていたダストの7〜8パーセントに当たる量のベースメタルや希少金属などを回収。港工場だけでも1カ月に400〜450トンぐらいのシュレッダーダストが出るので、少なくとも毎月約30トンの資源化が実現できました。

ひとまず、と前述したのは、日々、機械の調子を整えたり手入れを加えたりしながら、改良点を探り、更新の時期には改善工事を重ねていくことが前提のため。

「現場と机上とはギャップがありますので、我々は現場から声を届け、技術開発部からも意見を送ってもらおう。それを繰り返して精度を上げていくことが欠かせません」と港工場を統括する加藤浩。

現場とのそうしたキャッチボールが、技術開発部の根幹であり、ヒラキンにとって大事な命綱であることは間違いありません。



事業所の枠を越えた技術開発部との密な意見交換はヒラキンの命綱

営業本部 部長 加藤 浩